

エジプトにおける文化財保存問題： 1990年代以後の潮流を振り返って

長谷川 奏*・吉村 作治**

Preservation of Cultural Property in Egypt: Reviewing the Tendency after 1990s

So HASEGAWA* and Sakuji YOSHIMURA**

In this paper, we discussed the relationship between the nation and cultural heritage taking up Egypt after 1990s as an example. The basis of cultural administration in 1990's was formed by the political and economic guideline in the 80s — omni-directional diplomacy developed under the tendency of Islamism which had become conspicuous all over the Middle East, scheme of development mainly based on the private sector, policy to promote IT towards the activation of economy. The features of policy for cultural heritage will be summarized as follows: 1) While reinforcing the managerial scheme for cultural properties both domestic and abroad, the Government has actively accepted high technologies for the survey and research of cultural heritage; 2) The archives of historical heritage has been arranged to the scale that was not seen in the past, which have a possibility to be utilized multidirectionally at the historic sites and museums; 3) The construction plan of highways and residences was well tied up with the tourism promotion policy and deeply concerned in the movement of historic site arrangement. As a result, there was a rapid development in the preservation plan of historical theme zone, replenishment of museum facilities, opening of historic relics to the public and arrangement of site museum, and therefore, the arguments were stirred up on how properly the preservative sciences should be applied.

はじめに

本稿は、現代の西アジアの諸国家における文化財保存問題の潮流とその背景に関心を持つものである。西アジアは、初期文明からイスラーム文明に至るまでの多くの物質文化を残し、またユニバーサルな世界宗教と深い繋がりを有した一方で、近代以降、西欧の植民地主義と境界領域的な思考に最も熾烈に晒されてきた歴史的な経緯を特色とする地域である。本稿では、西アジア地域の有するこうした問題が、決して過去のものではなく、現代社会の歩みと深く関わるものであるという認識から、西アジア国家の文化行政の一端を紐解きながら、文化遺産と国家の関係を考える。そこで本稿では、エジプト（図1）を事例に選び、1990年代以後の動向に焦点を当てて、その位置づけを探る。冒頭にまず、エジプトの文化財行政の大きな流れを振り返って、近年の動向を位置づける指標としたい。次に、エジプトの文化財行政の具体的な動向を検討し、小論のまとめとする¹。

* 早稲田大学エジプト学研究所客員助教授

** 早稲田大学世界遺産研究所客員教授

1 本稿における検討事例は、主に以下の著作に依拠している。吉村作治、長谷川奏「エジプトにおける歴史的な文化財の保存問題—大カイロ圏の事例—」『日本中東学会年報』日本中東学会, vol.18-1, pp.215-226, 2003; 吉村作治, 長谷川奏「エジプトの文化財保存問題—ルクソールの事例から—」『エジプト学研究』早稲田大学エジプト学会, vol.12, pp.5-15, 2004; 長谷川奏, 吉村作治「エジプトにおける文化財の保存問題—デルタ地域の事例—」『イスラーム科学研究』早稲田大学イスラーム科学研究所, vol.1, pp.181-192, 2005; 長谷川奏, 吉村作治「エジプトにおける文化財の保存問題: オアシス地域の事

1. 文化財行政の歴史と近年の動向背景

エジプトの文化財は、エジプト考古学の始まりとなる19世紀以来、絶えず、国土の開発と深い関わりを持ってきた。それは、西欧による「古代エジプトの発見」が、もう一方で植民地主義の始まりを意味し、国土の開発が、殖産興業を指針とする近代化を目指すエジプトと、原料の獲得経済を企図する西欧の双方によって促進されたからであった。ナイルの氾濫リズムに基盤を置いたエジプトの伝統的なベイスン灌漑は、ナイル流域の各地に堰堤を築いた通年灌漑にとって変わり、人々と国土の繋がりは大きな転換期を迎えた。

19世紀半ばから後半に至る時代におけるエジプト経済の破綻の時代と、さらに19世紀末から始まるイギリス支配へと繋がる時代史は、エジプト考古学の歩みが、ナポレオンによる「エジプト誌」刊行、シャンポリオンによるエジプト語の解説、レブシウスによる精密な歴史地図作成を経て学問としての科学性を獲得していった時代として一般的に紹介される。しかし、この時代はまた、タフタウィ、アリー・ムバーラク、アフマド・サイドなどの在地の開明的な行政官僚や思想家によって、ひとたび失われた世界から蘇った文化遺産を自らの民族アイデンティティに取り戻すための運動や、教育体制の拡充化などが進められた時期としても記されなければならない²。

19世紀末から20世紀初頭にかけては、エジプト博物館、グレコ・ローマ博物館、イスラーム芸術博物館等が設立されていく時代でもある。しかし、エジプト博物館の運営がフランスの文化行政への発言権強化を意味したように、まだ初期の段階では博物館施設も西欧の研究者に握られていた。イギリス支配の体制が確立する19世紀末から20世紀初頭という時代はまた、最も熾烈にナショナリズム潮流が興った時代でもある。スアド・ザグルールらの運動により達成された1922年のエジプト独立は、著名なツタンカーメン王墓の発見の年でもあり、2つの側面を象徴した。未だ独立が実質的なイギリス支配にあった不完全なものであった面と、貴重な文化遺産が既に前世紀のように海外流出する事態を防ぐことができたという面の双方である。

両大戦期において、中東が石油戦略の拠点となり、またパレスチナ問題が表面化して中東戦争が勃発して行く中で、エジプトのナショナリズムは政治的な色彩を帯びていく（アラブ・ナショナリズム）。第2次大戦後の1950年代が、エジプト革命（1952年）という政治の画期を象徴するとすれば、また当該の時代は、エジプト考古局長にエジプト人が選任され、在地の考古学者によってピラミッド地域の学史に残る大きな発見（太陽の船）がなされた時代としても記憶される。

ナセル政権のもとで建設されたアスワン・ハイダム建設に伴うヌビア遺跡救済の国際キャンペーン（1960～70年代）は、大戦後の文化遺産と開発の問題を考える上で記念碑的事業となった³。1960年代は、エジプトのみならず、他の西アジアや東南アジア諸国と同様、大戦後の混乱から社会的な秩序が回復し始め、観光収入が増加していく時代であるが、その一方でアラブ社会主義の失敗と中東戦争における敗北は、アラブ・ナショナリズムの求心力

例)『イスラム科学研究』早稲田大学イスラム科学研究所, vol.2, pp.113-124, 2005; 吉村作治, 長谷川奏「中東文化遺産の公開手法とデジタル化: エジプトの事例」『イスラム科学研究』早稲田大学イスラム科学研究所, vol.2, 2005; 長谷川奏「アブ・シール南遺跡の調査成果開示方法について—案内表示板利用の可能性—」『エジプト学研究』早稲田大学エジプト学会, vol.12, pp.16-28, 2004; Hasegawa, S., "7. Social Environmental Research / Social Environmental Research on the Site", *Conservation of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III*, UNESCO and Institute of Egyptology, Waseda University, pp.161-167, 2004. 本稿は、これらで得られた各所見を、エジプトの文化行政史の観点から総合した。

2 Reid, D.M., *Whose Pharaohs? : Archaeology, museums, and Egyptian national identity from Napoleon to World War I*, Cairo, 2002.

3 Säve-Söderberg, T., *Temples and Tombs of Ancient Nubia*, London, 1987, pp.64-216. 河野靖『文化遺産の保存と国際協力』風響社, 1995年, pp.415-451.

が失墜し、後にイスラーム主義が中東全域で大きなうねりとなっていく土壌を作った大きな転換期でもあった⁴。

1970年代は、ナセルの後をついだサダトによって、一転して門戸開放の経済体制が進められたが、欧米との協調路線はまた自らアラブ世界における孤立をも招いた。サダト暗殺（1982年）後、門戸開放経済体制を引き継いだムバーラク政権の中で、1980年代は、シナイ半島が返還されたことによる石油生産の増大もあり、経済が進展をみせた。しかし、続く開発潮流は、特に文化財と都市部の接近という危機としても現れ、考古局は埋蔵文化財保護法の追加条例を公布した（1983年）⁵。アスワン・ハイダム建設の功罪も顕著となり、都市における「環境汚染」と地方における「環境破壊」の対比構造が顕著となった⁶。

ここで本稿の主題となる1990年代に入る。

1990年代は湾岸危機と共に始まり、ムバーラク政権は、エジプトは多国籍軍として参加した。以後同政権は、イスラーム問題には十分に配慮しつつも、欧米とも協調路線を歩む穏健な全方位外交を指針とし、中東における大きな発言権を得て行く。また経済的には、1990年代は、恒常的な財政赤字に対処するために、IMFと世界銀行の強い指導を受けた時代でもあった。これによって、民間が経済の主力となる構造ができ、90年代後半からはエジプト議会に開発推進者が進出していく⁷。外貨獲得に大きな位置を占める観光は、1997年のルクソール事件によって大きな打撃を受けたが、99年には回復の兆しをみせた。政府はIT産業開発戦略を打ち出し、2001年には、電子情報システムの整備（電子政府、電子商取引、電子教育等）、技術開発地域の建設、新都市化地域の開発等を推進した。

1990年代におけるこれら政治・経済の指針が、文化行政の中の文化財保存問題にいかに関わり、2007年現在の動向に繋がって行くのか。本稿では、文化財行政における、政府の基本指針、アーカイブ事業、史跡整備、の3つの大枠に従って、昨今の潮流を位置づけてみたい。

2. 政府の基本指針

エジプトにおいては、文化財の保存行政を担当する組織が文化省の下部組織にあるエジプト考古最高会議（Supreme Council of Antiquities：以下SCAと略記）である。ここには直轄の保存事業局があり、またカイロ博物館などでは、収蔵遺物の保存修復を行うための施設がある。一方、教育の場における文化財保存に関わる組織を代表するのが、カイロ大学考古学部の保存修復学科であり、本学科の卒業生は、保存修復士として各地の遺跡の修復事業に関わる⁸。エジプト考古学の場合では、外国隊のみで保存作業を進める例は稀で、多くの場合は、これ

4 酒井啓子「中東・アラブ世界における民族主義と宗教」酒井啓子編『民族主義とイスラーム—宗教とナショナリズムの相克と調和—』アジア経済研究所、2001年、p.51。Choueiri, Y. M., *Arab nationalism: A History - Nation and State in the Arab World*, Oxford, 2000, pp.190-197.

5 特に第20条は、考古遺跡と市街地が近接した際の規定が記されたことで注目される。当時、ギザのピラミッドのふもとのナズラト・サマンの町では、三大ピラミッド遺跡区に近接したエリアと、砂漠の縁まで発展する都市との間で深刻な事態を引き起こしていた。The Middle-East library for economic services, *Law No.117 of the year 1983, Promulgating the law on protection of antiquities*, Cairo, (n.d.).

6 Hopkins, N.S., Mehanna, S.R. and Saleh el-Haggar, *People and pollution: Cultural constructions and social action in Egypt*, Cairo, 2001.

7 伊能武治「開発戦略の転換と国家の構造」『アジ研ワールド・トレンド』第53号 1-2, 2000年, p.25.

8 学科として保存修復学科が設立されたのは中東で最も早い（1974年）。エジプト考古学ではポーランドが保存修復に長い歴史を持っていることから、同国において博士課程の知識・訓練を行う事例が多いという。市販されている同学科の教材によれば、ヘルワン台地の岩質の違いに注意を払った石材修復や、カイロ博物館所蔵の青銅彫像を事例にした錆の除去方法を述べるなど、地域に密着した学習項目が盛り込まれている。‘Abd al-Hādī, M., *Dirāsāt ‘ilmīya fī tarmīm wa shiyāna al-‘āthār ‘udwīya*, al-qāhira, 1997.

ら現地サイドと綿密な連携のもとに進められ、「政府のみが唯一の実行権威をもつ主体」であると謳われる⁹。

エジプトは地理的にも南北に長い国なので、カイロ周辺の文化財にとっては、気候との関わりも重要な問題となる。カイロ周辺は上エジプト地域とは異なり、地中海性気候の影響を受けて、冬に気温が大きく低下し、雨が降りやすくなるが、この多湿環境が文化財を劣化させる大きな要因でもある。また地表面に露呈する石灰岩や日乾煉瓦建造物は、夏と冬の温度差、湿度の日較差、砂漠から吹きつける強風などによって、恒常的な劣化への懸念に晒されている。この気候の特徴がもたらす劣化への懸念をいかに防ぐかが、エジプトの文化財の大きな課題となり、さまざまな対応がとられている¹⁰。

自然現象との関わりは天候ばかりではない。特に大地との関りでいえば、地下水の上昇問題は、最も深刻なものである。デルタ地域では、19世紀の末に調査されたギリシャの殖民都市ナウクラティスのように、既に地下水面に没してしまったものもあるし、ファイユーム地域にある中王国時代のピラミッドのように、地下遺構に上昇した水が入り込んで、当面有効な対応策が見当たらないものもある。しかしその一方で、この問題で頭を痛めるカルナク神殿、ルクソール神殿の例のように、1999年以来、アメリカ国際開発庁（USAID）の資金を利用しながら（受け皿は American Research Center）、スウェーデン・スウェスコ（SWESCO）とエジプトの合同調査班を組織して対応してきた例もある¹¹。

エジプト考古学は、19世紀初頭から続く「エジプト学」としての伝統的な歴史学としての手法を重要視するのはいうまでもない。先端技術の考古学への利用が近年盛んであるが、「エジプト学」の立場からではない一方的な先端技術の応用に対しては厳しい保守的な対応をとる事例もみられる。ギザのピラミッド調査において、フランスのアマチュア考古学者が先端技術を用いた調査申請を行ったのに対して、これを断固として排除した例などがその事例である。しかし、その一方で、遺跡の探索や保存の場には、先端技術を積極的に運用している¹²。

1990年代に入って、空間地理情報が GIS（Geographic Information System）等の地理情報利用システムや防災、ナビゲーション、古環境研究等に利用され始め、また湾岸危機後にこれまでの軍事的地区のいくつかが開放されると、新たな調査地の探索にさまざまなハイテク技術が応用された。フランス・エジプトの合同遺跡調査が水中考古学の技術を駆使して、アレクサンドリア湾やアブキール湾の海底に沈んだ灯台や王宮の発見を試みた例や、日本隊がダハシュールのピラミッド・ゾーンで、人工衛星の画像分析から、ポスト・アマルナ時代の遺跡を発見したのはその代表的な事例と言えるだろう¹³。

土器やその他の遺物の組成を蛍光 X 線で分析する手法は、既に1980～90年代に年代から、既に活発にエジプト考古学にも導入されている。土器研究の場合、いち早くリーダーシップをとったのはフランス隊であり、1991

9 *al-Ahram Weekly Online*（以下 AW と略記），no.755，“New law on the way”，27 October – 2 November, 2005.

10 カイロ近郊では、夏期の平均気温力が25～27度、冬期が15～17度程度となる。カイロ以南では、年間の降水量力 20mm 以下なのに対して、カイロ近郊は 20～50mm 程度を測る。また特に南方から強風が吹くハムシーンは、3～5月が最も多い。al-Ḥasainī, S.S., *Mausū' miṣr al-ḥadītha*, vol.3, uzāra al-thaqāfa, al-qāhira, Chicago, 1996, p.11.

11 ルクソール神殿においては、神殿が一般住居に囲まれてしまったために地盤が軟化したこととナイルの水位上昇があいまって、崩壊の危機に直面した。政府は、1991年から建設会社の ORASCOM の支援で、約800万ポンドの予算をもとに上記中庭東面にある22本の柱の修復を行なった。Johnson, W.R., “Luxor’s ground water problems”, *Egyptian Archaeology*（以下 EA と略記），no.19, 2001, p.10. Nasr, M., “Renewing the Sun Court of Luxor Temple”, *KMT*, vol.8, 1997, pp.39–41. uzāra al-thaqāfa, *mashrū' tarmīm: bahū amunḥtib al-thālith, ma'bad al-'uṣṣur*, al-qāhira, 1997.

12 *AW*, no.706, “Amateurs not allowed”, 2 – 8 September 2004. *AW*, no.604, “More secrets on the way?”, 19 – 25 September, 2002.

13 (Alexandria) Empereuer, J.-Y., “Alexandria: the necropolis”, *EA*, no.15, 1999, pp.26–28. (Dahshur) T. Sakata, M. Etaya, S. Yoshimura, S. Hasegawa et al., “Space Archaeology : Satellite explore the hidden wonders of Egypt”, *Discovering Archaeology, Scientific American*, no.2–1, 2000, pp.78–85.

年からは研究成果を報じ始め、土器研究における地域性の把握や編年の枠組み作成に大きな影響を与え現在に至っている。蛍光X線はファイアンスやガラスの分析や、壁画等の顔料分析にも頻繁に用いられ、多くの成果を生み出している¹⁴。

ミイラ研究には、CTスキャン分析が盛んである。近年では、政府が2005年にエジプト博物館にある11体のミイラをCTスキャンで調査し、さらにツタンカーメン王のミイラまで分析したことが大きなトピックとなった。ただし、対象が同王のように著名なミイラになると、いかに万全な保存科学の処置が準備されたかが論議され、またマスコミをはじめとする一般の強い関心を引くので、報道に対する公正さをめぐる議論も惹起される。DNA分析のような最先端の研究法も、安直な形で行われるのではなく、研究環境への十分な信頼が得られた時に初めて実行されるべきである、という慎重な姿勢もみられる。その一方で、政府は考古学の場に先端技術を導入することに逡巡しない立場も強調し、小型ロボットを用いたピラミッドの内部構造の探索プロジェクトも積極的に行っている¹⁵。

法整備の領域で、政府が現在緊急の課題としているのが、海外流出文化財に対する罰則規定である。埋蔵文化財が国家に所属するという考え方は、既に19世紀の末から20世紀初頭の時期にかけて発布されているが、それは単に古物商や商取引のライセンスを問うものであり、1951年に発掘と遺物輸送の規定を定めた際にも、遺物取引は止まず、最終的に禁止令が発布されるのは、先に述べた1983年の法令を待つことになる。しかしそれでもなお、盗難事件はやまないのが現状である。ここでは近年2～3年に起きたトピックを報じてみる¹⁶。

第1は、中央デルタに位置するピフベイト・アル=ヒガーラ遺跡にある末期～プトレマイオス王朝時代のイシス神殿からレリーフが盗難された事件である（2002年）。現地は莫大な量の美しいレリーフが野晒しで集積する特殊な環境にあり、同遺跡の出土品がニューヨークのクリスティ・オークションに売りに出されていた情報を、フランスの考古学者が指摘したことから摘発された。この問題は、多くの観光客が訪れる遺跡とは異なる、いわばセキュリティが手薄にならざるを得ない環境下における防犯の問題を喚起した。

第2は、ニューヨークの古美術商フレデリック・シュルツが、サッカー等で盗難された文化財の売却を図ったことに対し、ニューヨーク連邦裁判所が有罪判決を下した事件である（2002年）。当時の考古長官は、この判断が、1983年に発令された埋蔵文化財の追加条例に依拠して、エジプトで発見されたあらゆる文化財がエジプトに所属することを外国の法廷が認めた画期的な判決と評価している。

第3は、19世紀の後半にエジプト（ルクソール）から不法に持ち出された新王国時代の文化財がその後市場を転々とし、最終的な所有者となったカナダのアトランタ・ミハエル・カルロス博物館が、エジプト政府に自発的

14 *Chai de la céramique Égyptienne*, Institut Français d'Archaeologie Orientale, le Caire, vol.1, 1987 – vol.7, 2004.

15 ツタンカーメン王のミイラは、1922年にカーターが発見した際と、1968年に科学研究班が調査を行った際に、大きなダメージを受けたとされる。今回の調査においても、研究班が適正な専門家によって構成されていたか、棺を開ける際に殺菌処理が施されたかが議論された。また報道に関しても、外国の報道機関が独占体制を敷くものか、在地の報道機関に道は開かれているか等、かまびすしい議論がなされた。DNA分析に関しては、考古行政の責任者の1人は、1990年代に10体の王家のミイラに対するサンプル調査の成果が未だに得られていないことに対して、ネガティブな所見を述べている。AW, no.726, "Mummy scan furore", 20 – 26 January, 2005. 一方、ギザでは、小指サイズのロボットがクフ王のピラミッドに開けられた小さいシャフトを65mほど探査した。National Geographic社によるこの企画は世界的に放送された。AW, no.604, "More secrets on the way", 19 – 25 September, 2002.

16 紹介する3つのトピックと罰則強化の法整備に関する情報は、主に以下の報道に依拠する。1) ピフベイト・アル=ヒガーラ遺跡の石材盗難：AW, no.593, "Temple pillaged", 4 – 10 July, 2002. 2) フレデリック・シュルツの裁判：AW, no.591, "Smuggler behind bars", 20 – 26 June, 2002. 3) アトランタ・ミハエル・カルロス博物館の遺物返却：AW, no.662, "Return of the king", 30 October – 5 November, 2003. 4) 罰則強化の法整備：AW, no.755, *op.cit.*

に遺物を返却した報道である（2003年）。考古長官は、本決定を大きく評価し、この遺物の中に含まれていたラメセス1世とみられるミイラを、当時計画中であったルクソール博物館に陳列して、海外流出文化財の返却意義を大きくアピールした。

これら3つのトピックでも明らかなように、21世紀に入っても変わらず勃発する文化財盗難の実態は深刻であり、現状をより厳しく捉え直そうとするエジプト政府の昨今の姿勢は保存行政にも大きく関わる問題である。政府は、上記のような事態を眼前にし、古い法の再整備と罰則の強化が必要と主張し、文化財流出への対応策とする姿勢を強調している。

3. アーカイブ事業

2001年から本格的に推進されたエジプト全土の行政・金融サービスの迅速処理化（電子政府、電子取引）は、通信・情報技術省（Ministry of Communication of Information Technology）が1999年以来先端技術の振興を担当してきたものであった。同省は、電子ネットワーク整備（e-Readiness）、電子教育（e-Learning）、電子政府（e-Government）、電子取引（e-Business）、電子厚生（e-Health）、電子文化（e-Culture）、先端技術輸出振興（ICT Export Initiative）等を掲げ、中東地域を代表する情報通信のハブを作ることを目標とする¹⁷。

これらの電子化事業の中で、電子文化プロジェクトの中に通称 CULTNAT（The Center for Documentation of Cultural and Natural Heritage）という組織による文化遺産のデジタル事業がある。政府はITビジネスの振興をめざして、外国企業を税金や投資関連の条件で優遇して招致し、ピラミッドのふもとに330エーカーを占有する拠点スマート・ビレッジを建設した（写真1）。CULTNATは、アレクサンドリア図書館と提携し、有形文化財と無形文化財の双方が対象としたデジタル化を進め、現在以下の7つのプロジェクトを行っている¹⁸。

① エジプトの考古地図（“The Archaeological Map of Egypt”）

GISシステムによって、国内全土を眺めるスケールの遺跡地図から、モニター上のズームによって各県内における遺跡の位置、さらには詳細な遺跡分布図と対象の遺跡にまで到達させるものであり、代表的な遺跡には3Dによる立体映像を作っている。

② エジプトの建築遺産（“The Architectural Heritage of Egypt”）

エジプト建築の中でも、特にヨーロッパ文化の影響が強くとえられた1860～1940年代の建造物のアーカイブを行うものである。カイロを中心としながら、他の都市にも分布する建造物を対象に、考古学地図と同様な手法でシステムを構築する。

17 同計画では、地方にも600近くの政府が援助するインターネット基盤を整備して、都市と地方の格差解消に努める計画が進行している。またIT教育に関しても、5年間で20000～25000人のIT専門職と、4000～5000のネットワーク構築専門職の養成がめざされた。MCIT:<http://www.mcit.gov.eg/ptraining.asp/>。CULTNATの活動指針は、以下に詳しい。MCIT, *Strategic approach to Egypt's cultural heritage* (http://cultnat.org/download/Pdf_strategic_approach.html)

18 プロジェクトの情報は、主に以下に依拠する。エジプトの古地図：uzāra al-thaqāfa, *aṭlas al-muwāqī' al-'āthāriya, bi-muḥāfza al-sharqiya*, 2001(vol.1) – *muḥāfza al-mīnyā*, 2004(vol.7), al-qāhira; エジプトの建築遺産：MCIT, *19th and 20th Century architectural heritage of downtown area*, Cairo (CD-Rom); エジプトの自然遺産：MCIT, *The natural heritage documentation program*, Cairo (CD-Rom); エジプトの音楽遺産：CULTNAT, *mausū' a'lām al-mūsīqī al-'arabiya, 'Umm Kulthūm*, 2001(vol.1) – *Muḥammad 'Abd al-Waḥḥāb*, 2002(vol.3); エジプトの写真記録：MCIT, *The natural heritage documentation program*, Cairo (CD-Rom); イスラーム科学文献遺産：MCIT, *The contribution of the arab and Islamic civilizations to medical sciences, "Selections from the manuscripts collection of the National Library and archives of Egypt"*, Cairo (CD-Rom)。また関連の出版物としては、MCIT, *Suwaru'l-Kawakab, A description of constellations by 'Abdul-Rahman al-Sufī*, Cairo, (n.d.)

③ エジプトの自然遺産 (“The Natural Heritage of Egypt”)

シナイ半島，東方砂漠，西方砂漠を含め，国内に残されている植物相，動物相，地質のアーカイブを行うものであり，その成果は，自然史に関心を持つ人々から，環境 NGO に所属するものまでが利用できるデータベースの作成にあるという。

④ エジプトの民俗資料 (“The Egyptian Folklore”)

都市と農村の日常生活に残る伝統世界をアーカイブの対象とし，現在に残る祭礼，説話，詩，建築や農業の技法などの記録をめざす。成果報告ははまだ準備中とのことであるが，イスラーム地区の職人技術や，ラマダン月の慣習などから取り組みが始まるという。

⑤ エジプトの音楽遺産 (“The Musical Heritage of Egypt”)

アラブ音楽が力を持った1920～70年代における，希少な音楽の数々をアーカイブするものである。これらは，まず音楽情報の基礎資料を整理し，音楽家たちの活動年譜を作成し，遺された音楽を最新のメディアで再生できるようにグレードアップを図ることにある。

⑥ エジプトの写真記録 (“The Photographic Memory of Egypt”)

19世紀末から20世紀の初頭を中心にして撮影された古写真のアーカイブである。これらの中には，考古学の発掘風景，都市や農村で暮らす人々の日常風景などが写されている。これらの古写真は，カイロのラーナート・ランドロック社が保有する1200以上のプリント版に加えて，ガラス版などで残る初期の資料を世界各国から集めたものである。

⑦ イスラーム科学文献遺産 (“The Scientific Islamic Manuscripts Heritage”)

中央アジアからマグリブ地方にわたるイスラーム科学に関する文献のアーカイブ計画の一環である。国立図書館やアズハル大学所蔵の書籍の中から，天文学，物理学，化学などの領域に関するデジタル化が始められている。

CULTNATは，上記の7つのプロジェクトに加え，「Webに見る永久なるエジプト」(“Eternal Egypt on the WEB” <http://www.eternegypt.org/EternalEgyptWebsiteWeb/HomeServlet>)を進める。これはファラオ時代からイスラーム時代までの文化遺産を対象として基本検索を可能とするもので，当面は代表的な事例に限られてはいるが，遺構や遺物の3D復元をはじめ，さまざまな形で情報の利用が可能となる。またこれは，直径10mの円弧上の半分(180度)にわたって広がるスクリーンを利用したデジタル映像のシステム(Cultrama)によって，長大なパノラマ画像を映し出す演出も可能である。

さて，これらの歴史遺産のアーカイブはまた，学術の場だけでなく，史跡整備の中でも活用されている点を紹介したい。ルクソールでは，まず都市と墓地の位置関係を把握するための精密測量がエジプト政府とアメリカ隊の共同で行われ，さらにより細かいスケールで，王家の谷の墓地の分布図が作られ，各墓地で作成された遺構復元図(アイソメ図)と連結された。これによって，極めて精巧な遺跡地図ができあがり，その成果が観光客のための案内表示板に生かされている。表示板には，出土状況図や，調査の歴史を紹介する写真も盛り込まれるものもあり，観光客の遺跡理解を大きく助ける働きをしている¹⁹(写真2)。

19 ‘Abd al-‘Azīz, Ṣ, al-Bailī, M., Weeks, K., Block, E. et al., *Wādī al-mulūk: dlīl al-lāftāt*, al-qāhira, (n.d.). このプロジェクトは，World Monuments Fundの資金援助を受けている。Ikram, S. and Forbes, D., “KV5: Retrospects & Prospects”, *KMT*, vol.7-1, 1996, pp.38-51. 考古学上の成果は以下。Weeks, K., *KV5: A preliminary report on the excavation of the tomb of the sons of Ramesses II in the Valley of the Kings*, 2000, Cairo. イスラーム考古学の分野では，リモートセンシングは，イスラーム地区におけるモスク，マドラサ，ワカーラ等の分布調査にも用いられている。

博物館が有する考古遺物のデジタル情報は、一般の観光客にも開示されて、展示遺物を多角的に把握するためのインフラとしても利用が始まっている。ピラミッド・ゾーンで現在建設が進んでいるグランド・ミュージアムは、これまでダウンタウンにあったエジプト博物館に代わる中心的な施設になる予定であるが、ここでは、見学者が、備え付けのパソコンを利用して、出土遺物の由来や、さまざまな属性の情報を検索する体制の完備がめざされている。2003年に完成したアレクサンドリア図書館のイスラーム写本室や、2004年に建設されたアレクサンドリア・ナショナル・ミュージアムでは既にこうした試験的な試みが開始されており、これらの蓄積が生かされたシステムができると思われる²⁰。

エジプト考古最高会議のホームページ（“The Plateau : Official Web Site of Dr. Zahi Hawass”, <http://guardians/net.hawass/>）では、SCAが行う発掘の成果や将来的な博物館展示の情報などを開示し、さらに外国調査隊の調査成果をトピックとして伝えている。後者では、博物館収蔵遺物の一部に解説を加えて紹介したり、保存修復中の遺物を紹介するページを作成している。このデジタル潮流の中で、政府の考古刊行物も、内容、装丁のいずれにおいても、充実化が図られ、発掘や修復の成果を精巧に報ずるものが始めている²¹。

4. 史跡整備

1) カイロ (図2)

カイロの産業地域を包括した大カイロ圏 (Greater Cairo) は1960年代からの急激な人口集中の結果、2004年には約1580万人という巨大な人口を擁することとなった。大カイロ圏には、全人口の約20%が集中している。大カイロ圏の西部は砂漠地帯であり、ここには最も多くの観光客を誘致するピラミッド・ゾーンがある。カイロの都市部には王朝時代の文化遺産の痕跡は殆どみられないが、キリスト教やイスラームの文化遺産がひしめくことがその特徴となる。

三大ピラミッドが立ち並ぶギザ遺跡では、観光客が文化財に与える直接的な損傷や、観光客が齎す二酸化炭素と水蒸気による劣化、観光バスが与える振動などに絶えず悩まされてきた。さらにこの地は近隣の採石場からもたらされる発破振動、近隣村落からの建造物進出、ごみ焼却の際の煤煙、車両の排気ガスなどが、建造物に大きな影響を与えてきた。そこで近年では、三大ピラミッドのうちの一つは1年を通じて閉鎖し、塩分の析出防止、室内清浄、照明器具の備え付け、破壊防止のための設備拡充などを行なっている²²。

三大ピラミッドの北側に位置する砂漠の縁は、地方都市を結ぶハイウェイと、大カイロ圏を結ぶ環状道路との接続ポイントでもあり、考古行政にも重要な地点になっている。先に述べたIT政策の拠点スマート・ビレッジは

20 1903年に建てられたタハリール広場のエジプト博物館が老朽化したために立案された。ミイラの搬送は行なわれないが、ツタンカーメン王関連遺物の全点 (3500点) を含む15万点の展示が計画されている。Cairo Times, vol.5, Issue 44, 2002. The Grand Egyptian Museum (<http://www.gem.gov.eg/main.htm>) アレクサンドリア図書館が総合的な文化施設になっている点は以下。(古写本) Bibliotheca Alexandrina, *Manuscripts museum & specialized reading rooms*, Alexandria, 2002. (古写真) Bibliotheca Alexandrina, *Impressions of Alexandria: The Awad collection*, Alexandria, 2002. (映画文化) Bibliotheca Alexandrina, *The world of Shadi abd al-Salam*, Alexandria, 2002.

21 一例として, Zāhī Ḥawwās, *jazīra kalābusha*, al-qāhira, 2004; Zāhī Ḥawwās, *jāmi' aḥmad bun tūlūn*, al-qāhira, 2004 など。考古長官は、これらの近年の科学的な出版は、国際的な水準を目指したものであり、エジプト考古学の新しい時代を切り開くものと位置づけている。

22 ギザ遺跡では、毎月平均で3万人の観光客が訪れる。ピラミッドの内部で各人が排出する二酸化炭素は約20グラムで、ピラミッド内部の湿度は77%に上がり、塩分析出などをひきおこすという。AW, no.438, “Face-lift for Khafre”, 15–21 July, 1999. スフィンクスは、1980年代にもたびたび修復が行われ、88年には肩部分が崩落したために保存組織が再編成され、89年から97年にわたるまで、大規模な修復事業が行われた。Esmail, F. A., *Sphinx symposium proceedings*, Cairo, 1992, pp.68–73.

この地点にあり、これまでのエジプト博物館に代わり最も主要な博物館施設となるグランド・ミュージアムも同地に建設される予定である（第3章参照）。こうした潮流とあいまって、ピラミッド・ゾーンに接した耕地帯では、宅地開発や別荘開発も推進されて、観光、交通、教育、通信などのインフラ整備が進んでいる。

ギザ遺跡以南のピラミッド・ゾーンでも、95年あたりから新たな遺跡の公開と地方博物館の建設が行われている。アブシール遺跡は、第5王朝の歴史建造物が著名であるが、従来アクセスが大変難しい場であったため、本格的な公開に向けた環境整備が進められている。ダハシュール遺跡は、1996年に従来軍事地区であった場が考古局管理の場に移行するという特殊な経緯を経た。ここでは、ピラミッド斜面の堆積土を利用して入場のための昇降路を開設し、涸れ谷に主要ピラミッド同士を連結する簡易舗装のアクセス・ルートを整備する等の観光地化が推進された。サッカラ遺跡では、2006年に、在地の主要出土品を展示するイムホテプ博物館が建設され、観光警察本部の配置も博物館の隣に再整備された²³。

カイロの都市内部では、教会やモスクを対象に多くの保存修復事業が文化省の主導で進められている。歴史的建造物の集中地区を代表するのは、キリスト教開迎の施設がひしめくオールド・カイロである。同地区の建造物は、ナイルの水位上昇と排水設備の不備による下部遺構の傷みが問題となっていたが、1992年のカイロ地震に際して、柱、壁、天井などの被災部分に対して修復を行い、近年ではアムル・モスクやベン・エズラのシナゴグ、ムアッラカ教会を含めたユダヤ・コプト・イスラームの総合的遺跡修復プロジェクトが進められている²⁴。

一方、イスラーム地区を代表する修復事業は、オスマン朝時代のスハイミー邸の修復事業である。この事業では、対象の邸宅のみならず、近隣の住宅や商店街に囲まれた環境までを改善して、周辺を歴史的な景観に合わせて修復した点が注目される。イスラーム地区は、住居、商店街、工房などの密集地区であり、歴史的建造物周辺の環境整備を伴う場合が多く、行政の側との協力が必須となる。一例として、当該地域における交通の中核であるアズハル通りがもたらす交通渋滞、排気ガス、振動を回避するために、2001年秋に建設されたアズハル・トンネルは「歴史的カイロの回復計画（Historic Cairo Rehabilitation Project）」を代表する事業となった²⁵。イスラーム地区では現在も多くの保存プロジェクトが進行中であり（写真3）、SCAとユネスコの共同シンポジウムも開催され、保存科学の適正な応用に関する議論も喚起されている²⁶。

23 ピラミッド・ゾーンの遺跡公開情報は、以下の書を参照している。アブシール遺跡：uzāra al-thaqāfa, *Mintīqa 'āthār abūšīr, al-qāhira*, (n.d.). ダハシュール遺跡：uzāra al-thaqāfa, *Mintīqa 'āthār dahshūr, al-qāhira*, (n.d.). アブシール遺跡は、サフラー王の葬祭殿と参道がいち早く整備されたが、ピラミッド本体も含めると大規模な修復が必要であり、現在に至っている。ダハシュール遺跡の公開は、近隣の村民の交通アクセスルートの活発化をも促している。

24 Bacharach, J.I., *The restoration and conservation of Islamic monuments in Egypt*, Cairo, 1995. アムル・モスクは80年代と90年代に修復が行われたが、96年に天井が崩落した。ムアッラカ教会でも、97年に南側の門を中心に、教会堂を支える柱が傾き始めた。AW, no.493, "A restoration controversy", 3-9 August, 2000.

25 92年に第1期の300万ドルの援助で事業は始まったが、その直後に、スハイミー邸のみではなく、その周域の修復も必須であることが判明し、95年からは第2期が追加100万ドルの援助で行なわれた。Ministry of Culture, *al-Darb al-Asfar: Documentation, restoration, conservation and development project*, Cairo, (n.d.).

イスラーム地区では、アズハル周辺とダルブ・アル=アフマルに、政府によって修復が計画されている歴史的建造物が集中する。これらの中には、ヨーロッパ・コミッションが支援するワカーラ修復事業などがある。建造物周辺の整備を進めるためには、イスラーム地区に住む住民を、ムカッタム台地の麓のマンシーヤ・アル=ナスル地区に移住させる計画もある。AW, no.420, "Past glory, new life", 11-17 March, 1999. アズハル通りはイズベキーヤからサラハ・サーレム通りまでの2.6kmであるが、1920年代に作られたこの道路は、アズハル地区を二分してしまう上に、騒音・排気ガスが建造物に甚大な被害を齎すとされ、トンネル建設が行われた。AW, no.554, "Test drive", 4-10 October, 2001

26 AW, no.575, "No easy task", 28 Feb. - 6 March, 2002.

2) ルクソール (図3)

ルクソールは、中王国、新王国の王権の出自となった場であり、祭祀の拠点となったことから、多くの歴史的建造物が残されている地として、最も著名な場である。ルクソールでは、古代の都市構造の名残から、20世紀に入っても、カルナク神殿とルクソール神殿という王朝時代の2つの代表的な神殿周辺が中心的な居住域となってきたが、1980年代以降は、両神殿の南北、駅の裏側等へ発展が加速され、1996年統計では38万人の人口を擁する上エジプト第1の都市となり、都市の膨張はさらに続いている²⁷。

ルクソールの東岸では、河岸通りにある2つの博物館が、地域の魅力を演出している。ルクソール博物館は、1992年からはルクソール神殿のカシェ出土の特別展示コーナーを設けて、同地の近隣の調査成果を報じてきたが、2003年からはさらに企画展示のコーナーを設けて、地域の個性をアピールする拠点を形成している。海岸通りの接岸帯の遊歩道には、1997年にミイラ博物館が建設された²⁸。

カルナク神殿では、フランス隊が中心となりエジプト政府と共同で復元作業を続けてきたが、1997年からはカルナク神殿近隣からの出土品も含めて、中王国時代から新王国時代にわたるチャペルや小神殿などの復元が進み、その成果がサイト・ミュージアムに結集している²⁹。ルクソール神殿では、地下水の上昇に伴い、第2列柱室の崩壊が懸念された際に、列柱の基礎部のつけかえを手始めに、総計22本の柱全体を復元していった大プロジェクトが行われた経緯があるが、政府、USAID、SWESCOの合同調査班は、1999年以来取り組んできたこの地下水問題に、ひとまずの決着をつけた(第2章参照)。

ルクソール西岸は、古代のネクロポリスである。西岸の船着き場から最も近いメンノン像の周辺では、1990年頃からドイツ隊により新王国時代アメンヘテプ3世に関わる多数の神殿ブロックや神像が沃土の中から掘り起こされ、観光バスの駐車場も整備されて、近年ではここが西岸遺跡区の第1拠点となった。しかし同地の遺跡整備には、地下水位の上昇に伴う地盤軟化と腐食性塩分の問題が深刻に関わっている³⁰。

隣接するメルエンプタハ王の葬祭殿は、スイス隊の17年間の調査成果が、2001年に画期的なサイト・ミュージアムとして公開された(写真4)。遺跡の中心を占める神殿部分では、失われた日乾煉瓦の壁体を上部まで復元し、出土したブロックを復元想定場にはめこんで公開するなどの手法を用いている。また野外施設には神殿部位の主要な石材を展示し、現地に展示施設を建てて、石材以外の代表的な出土遺物や壁、装飾などを展示するコーナーを設けている³¹。

西岸の遺跡を代表する王家の谷では、1999年頃から貴族の墓等で新たな遺跡の公開が進んだ潮流を受けて、2002

27 低所得者層を対象とした住宅供給プロジェクトでは、1998年頃から、デルタ、カイロ、中部エジプト、上エジプトの9つの都市を対象にした計画が巡行し、6年間で7万戸の建設がめざされた。東岸の空港近くにある新ターベ住宅 (madīna ṭība al-jadīda) の建設はその計画の1つである。AW, no.660, "Housing for all", 16-22 October, 2003.

28 従来の展示室とは別棟で、「エジプトにおける帝国と戦争」を主題とする展示館を建設した。先述したカナダの博物館から返還されたラメセス1世とされるミイラは、ここに展示されることとなった。AW, no.691, "Ancient might", 20-26 May, 2004.

29 フランス・エジプト合同調査隊が行ってきたサイト・ミュージアムの整備は以下。Golvin, J.-C. et Goyon, J.-C., *Les bâtisseurs de KARNAK*, 1987, Paris. Ministry of Culture, *The open air museum at Karnak*, Cairo, 1986. 1997年からは、第2中庭から集められたハトシェプスト女王の赤の神殿や、中王国時代のセンウスト1世の神殿等を始めとして、復元成果が集結している。National archives and library, *Karnak temples*, Cairo, 2002, pp.30-32.

30 1989~90年から始まったメンノン像の建築学的調査の途上で、同葬祭神殿に付属する中庭床面などの重要な遺構やアメンヘテプ3世の彫像やスフィンクス像など多数の彫像が見つかった。これらは塩分濃度の高い沃土から発見されているので、保存手法が問題となっている。Sourouzian, H., "New colossal statues at Kom el-Hettan", *EA*, vol.21, 2002, pp.36-37.

31 この画期的なサイト・ミュージアムの開設は、この地が考古局と遺跡警察のオフィスに隣接しており、保安体制が確立されているために可能となった特殊事情があると思われる。Jarits, H., *The mortuary temple of Meremthah at Qurna-Luxor*, Cairo, (n.d.). Jarits, H., "The museum of mortuary temple of Meremthah", *EA*, no.19, 2001, pp.20-24.

年にはツタンカーメン王墓を含めた約15基の墓が再整備された。政府は、多数の観光客の入場によって高まる湿度が壁画に及ぼす影響を勘案して、見学者の数を制限するなどの対応策をとりつつも、墓内の壁画修復を推し進め、積極的に公開している³²。さらに政府は、アメリカ大学と連携して進めた地図作成プロジェクトの成果を案内表示板として、この王家の谷で最も有効に生かしている（第3章参照）。ディール・アル=バフリーや王妃の谷でも、王家の谷を基本モデルにした遺跡整備が進められている³³。

ルクソールでは、遺跡区に住む住民の問題がこれまでもたびたび議論され、新住宅に移転するプロジェクトが1990年代後半から進められてきたが、近年ではルクソール西岸北端のターリフへの移転が急な展開をみせた。この計画は、元来は1994年11月に上エジプト全域を襲った豪雨によってクルナ村周辺の村落が壊滅的な被害にあったことを受けて建設された住宅計画であり、ルクソール西岸南端でも同様の被災者用住宅建設が進行された。1997年に建設されたバグダーディー架橋と東岸、西岸の幹線道路が交わる地点のアクセス・ポイントは、中部エジプトと南部のアスワンとの間を結ぶ新ハイウェイの交点にもあたり、環境整備が進んでいる³⁴。

3) アレクサンドリア (図4)

アレクサンドリアは、ギリシャ・ローマ時代の遺跡の集中分布地域である。さらにアレクサンドリアを特徴付けるのは、ここが地中海性気候の強い影響下にあることから高い湿度に対する文化遺産保存手法が課題となっていることと、同地は人口300万人を擁するエジプト第2の大都市であり、鉄工業を主体とした一大産業地域を有することから、環境汚染に起因する文化遺産への影響が、議論される場となっていることである³⁵。

アレクサンドリアには、アンフシ墓地、チャットビー海岸墓地、ムスタファ・パシヤ墓地などのヘレニズム時代の著名な墓地があるが、海辺に面したところに位置しているために、高湿度による劣化が最も懸念されてきた。1990年代以後、これらの遺跡では、遺跡から出土した石棺や柱、柱頭などが臙天で展示され、降雨による劣化を防ぐために、幕屋が建設されるなどの整備が進んだ³⁶。

32 1999年には、新王国第18王朝のセンエンムトの墓と第19王朝のメルエンブタハ王の墓が新たに修復を受けて公開され、その時点で、王家の谷と王妃の谷で総計21基、貴族の墓で36基の墳墓が一般公開されることとなった。2000年にはさらに、王家の谷とドゥラ・アブ・アル=ナーガーで、計6基の墳墓が新たに公開された。これらの墓は、墳墓内の清掃、亀裂部分へのモルタル充填、壁画汚損箇所のクリーニング、劣化箇所の補強、という手順で整備され、豪雨による壁画の損壊を防御する施設も敷設された。AW, no.450, "New tombs in Luxor", 7-13 October, 1999. Naser, M., "Six newly restored tombs in the Theban necropolis", *KMT*, vol.11-1, 2000, pp.26-35 and 71.

33 ディール・アル=バフリーでは、ポーランド隊が長く行ってきた葬祭神殿を中心に、周辺にある末期王朝時代の大型墳墓もエリアに含め、さらに2002年からは長く閉鎖されてきた第3テラスを含めて公開を行った。王妃の谷では、ゲッティ保存研究所が壁画修復を行ったネフェルタリ王妃墓を2001年に一般公開したのを機縁に、周辺の墳墓の整備を行った。Pawlicki, E., "Deir el-Bahri: Restoring Hatshepsut's Temple", *EA*, no.12, 1998, pp.15-17. McDonald, J.K., *House of Eternity: The tomb of Nefertari*, London, 1996. この他にも、ラメセウム等の耕地際の諸神殿でも発掘と同時に修復作業が進んでいる。Leblanc, C., "Quelque suggestions pour la protection et la conservation du patrimoine pharaonique à Thèbes ouest", *Memnonia*, vol. XI, 2000.

34 クルナ村住民の移動は、既に大戦後の1940年代後半から、現在の村落の東6kmの運河沿いの土地に7000人の移住が計画され、新クルナ村と呼ばれた。1994年11月の豪雨は、ソハグ東岸70の村落と、ルクソール西岸の500戸に甚大な被害を齎した (*Reuters News Service*, 1994/11/04)。被災者用に建造された北端の村は、アル=ラワガハ村 (qarya al-rawājahā) と呼ばれ、1998年の段階で、8500人の移住を可能とするスペースが整備されており、最終的には15000戸の移住が目指された。南端の村落には、大統領夫人の名 (qarya Sūzān Mubārak) がつけられた。AW, no.376, "Waiting for the future", 7-13 May, 1998.

35 アレクサンドリア海岸部はアガミーから、西方120kmまでがリゾート地になっているが、海もマレオティス湖共に、環境汚染が深刻化している。政府は、1994年までに対策を講じたが、汚染問題は現在も続いている。AW, no.537, "Alexandria's heart's mind", 7-13 June, 2001.

36 これらの遺跡の概要は、以下を参照されたい。Venit, M.S., *Monumental tombs of ancient Alexandria: The theater of the dead*, Cambridge, 2002. アレクサンドリアの西港近くのガッパリー地区で発見されたヘレニズム時代墓地に関しては以下。Empereur, J.-Y., "Alexandria: the nectopolis", *EA*, no.15, 1999, pp.26-28.

アレクサンドリアでは、90年代の半ば以後にフランス隊と政府によって進められた海底遺跡の調査成果と、新たに着目されたアレクサンドリアの歴史的トポグラフィーを総合した遺跡整備がさらに進められた。ポンペイの柱として知られるセラピス神殿址は、その歴史的重要性に対して、元来の遺構範囲を視覚的に追うことが難しかったが、回り階段を設営して、遺跡全体の構造が見渡せるように整備した。コーム・アル=ディッカ遺跡の円形劇場では、アレクサンドリア湾海底調査で引き上げた遺物を展示するサイト・ミュージアムと、本遺跡から出土したモザイクを現地で鑑賞することができる施設が作られた。また古代の劇場を見渡す遺跡の高台周辺は、野外音楽のパフォーマンスを楽しむことができる複合文化施設となった³⁷ (写真5)。

博物館施設に関しては、100年以上の歴史を誇るグレコ・ローマ博物館に加えて、2002年から2004年にかけて、アレクサンドリア図書館内に設けられた博物館と、ナショナル・ミュージアムの2つの博物館が新たに建設された。前者は、アレクサンドリア図書館の建設場所近郊からみつかったモザイクやアレクサンドリア湾・アブキール湾の水中から古代から引き上げられた出土品を中心的展示品にし、後者は古代エジプトからイスラームまでの文化を通時的に概観することができる総合展示を行う³⁸。またアレクサンドリア図書館は、図書閲覧の場としてだけでなく、イスラーム古文書、アレクサンドリアの古写真、映画文化の歴史などを多角的に楽しむことができる総合文化施設となっている (第3章参照)。

アレクサンドリア外郭部のうち、アブキールは1990年代後半から湾内で水中調査が進み、古代のメノウティスあるいはヘラクリオンに同定される都市に由来する多数の遺物が取り上げられて注目された。またアレクサンドリアの30kmほど西方のナイル支流の河口には、オスマン朝時代の文化遺産が多く分布するラシードがあるが、地中海沿岸部を結ぶハイウェイ道路は、マレオティス湖～イドゥク湖～ブルルス湖を結んでおり、こうした地域が今後は観光拠点となる可能性がある³⁹。

外郭部の西側のボルグ・アル=アラブと呼ばれる地域には、古代末期にオシリス信仰の中心地として栄えたタブオシリス・マグナとキリスト教の巡礼拠点として知られたメナス修道院がある。しかし、90年代に入って、このボルグ・アル=アラブ一帯が住宅建設推進地域となり、アレクサンドリア、カイロ、アラメイン側の三方に繋がる舗装道路が整備され、道路沿いには多数の大型工場が林立するようになった⁴⁰。

4) その他の地域 (図1)

デルタ地域の王朝時代遺跡として著名な、テル・バスタ遺跡 (写真6) やタニス遺跡等の東方デルタの遺跡で

37 いわゆる「鳥のモザイク」などで知られるコーム・アル=ディッカ遺跡のモザイク舗床の存在は、既に1970年代から確認されていたが、ここに新たなサイト・ミュージアムの建設が具体化したことで、新たに掘り出されて、1988年より USAID とアメリカン・リサーチセンターの協力のもとに現地の整備が行われた。AW, no.529, "Alexandria's ancient expats", 12-18 April, 2001.

38 SCA, *Bibliotheca Alexandrina: The archaeological museum*, Cairo, 2002. SCA, *Alexandria national museum*, Cairo, 2003.

39 アブキール湾の調査に関しては以下を参照。AW, no.538, "Between legend and reality", 14-20 June 2001. マルサ・マトルーフから、デルタの海岸沿いを通り、北シナイに至る 1050km のハイウェイ建設をめざすものである。これらのうち、東西両地区は既に完成しているが、中央部のアレクサンドリア～ポートサイド間が現在建設中である。この完成に伴い、従来の走行距離は40%短縮されるため、ラシードなどの観光環境も大きく変貌するものと思われる。uzāra al-thaqāfa, *ma'rad 'āthār madīna rashīd, rashīd*, 1995. AW, no.451, "There and back again", 14-20 October, 1999.

40 ボルグ・アル=アラブ住宅は、50万人の移住が見込まれて、1979年より開発が推進されたが、1994年までに売却目標が達せられず、開発が一時頓挫した。しかし、2000年までに、さらに 120m. ポンドの投資があり、化学・金属・木工を中心とした工場の建設と、労働者の居住区建設をめざし、新ボルグ・アル=アラブ住宅やムバーラク・サイエンス・シティなどができた。近年では、この地区に、飛行場の建設も進められている。Fouad, N.I., and Barbara, I., *Egypt: An economic geography*, 2003, Cairo, p.227.

は、遺跡から出土した多くの石材が外国隊（フランス隊、ドイツ隊）によって整理され、政府の手によって遺跡公園ともいべき施設に整備された。また東方デルタのイスマイリーヤ、ボートサイド、ダミエッタなどには、19～20世紀の近代建築（Euromed Heritage）が多く残されており、これを対象とした保存修復プロジェクトが、ヨーロッパ共同体（EU）とエジプト政府の手によって進められている⁴¹。

ダークラ・オアシスのキラア・ダッバ遺跡では、フランス考古学研究所が、古王国時代のマスタバの礼拝施設と地下の埋葬施設の空間を分離して、見学者の視覚に訴えた画期的な保存事業を行っている（写真7）。ディール・アル＝ハガル遺跡でも、政府とカナダ隊は、神殿の入り口に調査史とその成果を示す設備を配備した（写真8）。カールガ・オアシスでも、ローマ時代の軍営キャンプやキリスト教時代の墓地等、史跡整備を待つ遺跡は多い。カールガ・オアシス南端からはルクソール南のアルマントに達するハイウェイが整備されたので、今後オアシス観光は上エジプト観光とをつないだ魅力により大いに注目される可能性がある⁴²。

ちなみに、上エジプトのアスワンでは2002年にヌビア博物館が建設され、カラブシャ神殿が40年ぶりに公開された。エドフ神殿では大規模な修復が行われ、観光客の積極的な誘致が始まっている。また鉄道も、カールガ・オアシスと紅海沿岸のサファーガの間が連結されているので、上エジプトのケナーに開発潮流が訪れている。さらに地方博物館建設計画は、紅海沿岸（ハルガダ）や、シナイ半島（アリーシュ、シャルム・アル＝シェイク）といったところにまで及んでいる⁴³。

ま と め

1990年代の文化行政は、その前の80年代の遺産を色濃く受け継いだところから始まった。80年代以降、中東全域で顕著になるイスラーム主義の風潮の中で進められた全方位外交と、民間部門を経済の主力とする新たな開発体制、経済活性化に向けたIT推進政策は、文化行政の背景の骨格をなしたと思われる。

本稿では、1990年以降の文化財を対象とした文化行政を検討した結果、以下の主要な3点の所見が得られた。

1) 政府は海外流出文化財に対する管理体制を強化しつつ、文化遺産の調査・研究には外来の先端技術を積極的に受容してきた。2) 情報通信省とタイアップして進める歴史遺産のアーカイブはかつてない規模で進み、これらは史跡や博物館の中で多角的利用される可能性がある。3) ハイウェイや住宅の建設計画も観光推進策と結びつき、史跡整備の動向に深く関わった。これにより、歴史的テーマ地区の保存計画、博物館施設の充実化、遺跡の公開、サイト・ミュージアムの整備等が急激に展開したがゆえに、保存科学の適正な応用に関する議論も喚起された。

41 この保存プロジェクトは、“Patrimoine Partager”と称され、近代建築の保存のために30m.ユーロを拠出するとされる。当面はカイロではアブディン宮殿、アレクサンドリアでは、ラース・アル＝ティーン宮殿などから保存が進められている。
AW, no.603, “Mediterranean pearls”, 12–18 September, 2002.

42 AW, no.569, “How remote can you be?”, 17–23 January, 2002.

43 AW, no.408, “Dune song”, 17–23 December 1998. AW, no.777, “New museums for all”, 10–18 January 2006.

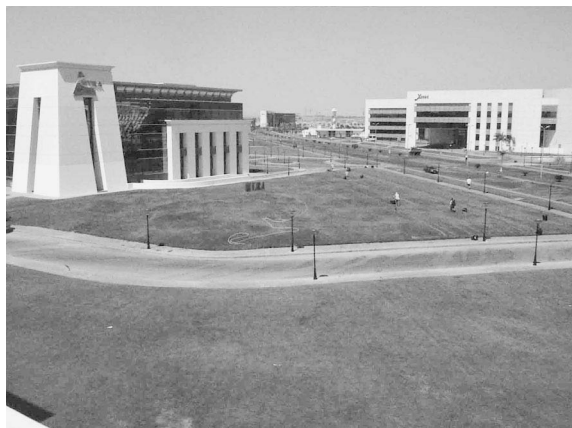


写真1



写真2



写真3



写真4

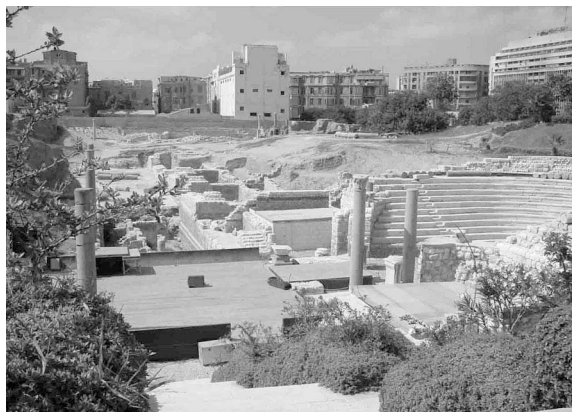


写真5



写真6



写真7

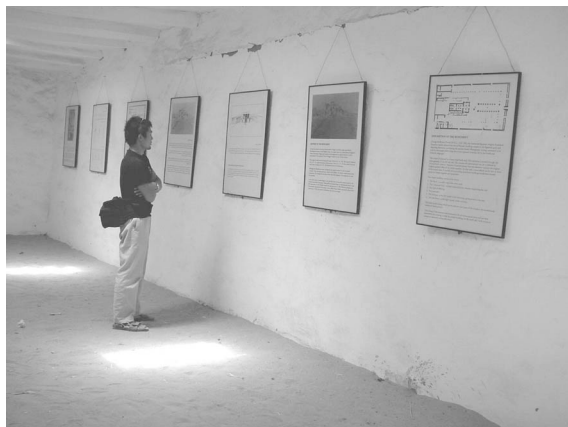


写真8

